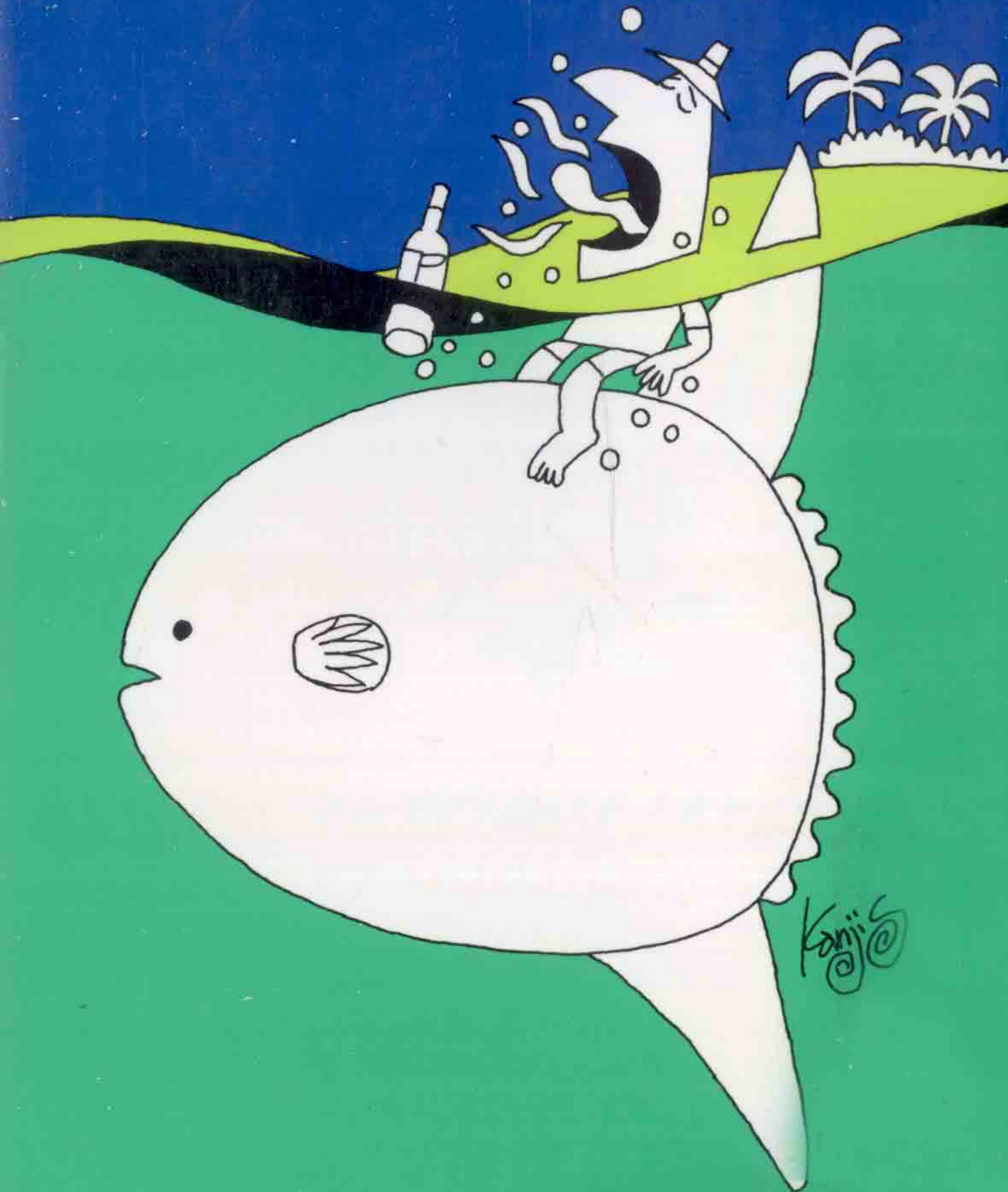


マンボウあくびノオト

北 杜夫





中公文庫

マンボウあくびノオト

定価はカバーに表示してあります。

1997年3月3日印刷

1997年3月18日発行

著者 ^{きた}北 ^{もり お}杜夫

発行者 嶋中鵬二

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA, INC. / Morio Kita

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202811-6 C1195

Printed in Japan

乱丁本、落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

マンボウあくびノオト

北 杜 夫



中央公論社

目次

1

なまけもの論

なまけもの再論

ホラ天国・八丈島

女人礼讃

アフリカ沖のながあい航海

2

第三惑星ホラ株式会社

少年と狼

115 83 63 53 37 23 11

彼は新しい日記帳を抱いて泣く

活動写真

3

人われを白痴とよぶ

当世医者心得

葡萄酒のこと

酒をやめさせる薬

ボロ車のこと

子供マンガはやはり害がある？

私の児童漫画ロン

名前のことなど

虫をくれるのは困る

232

一等船客失格

236

アフリカ・マイマイ

239

宮古島にて

243

沖縄のはずれの島

247

税関にて

254

大 風

260

宇宙の加速度

264

朝の光

268

解 説

森 禮 子

273

マンボウあくびノオト



岡田

1

なまけもの論

女は男をオウボウであるという。男はそれに対し、俺たちには仕事がある、という。仕事というのが男の逃げ言葉で、なかにはたいへん威張って女房にネクタイを結ばせ、そろえさせた靴に足を突っこみ、おもむろにカバンを受取り、ちょっと眉などしかめてみせ、「なにしろ男は門を一步出れば、七人の敵がある」などとうそぶく。そしてふんぞりかえって門を出たとたん、バナナの皮にすべって仰向けに転倒し、おそろしい顔をしてうしろをふりかえり、「みる、このとおりだ!」とうめき、なおさらふんぞりかえって行ってしまふ。こういう男にかぎり、会社に着くと机の上に鼻毛など植えていて何にもしない。

と、ここまで読むと女性には喜ぶだろうが、現実にはなかなかこのくらいのことで片づく問題ではない。第一、バナナの皮でひっくりかえる男が現代にいるかどうか。お

そらく遠い過去においてバナナの皮にすべった人間が幾人かいたのであろう。ところが数えきれぬ文章や漫画によって、バナナの皮の危険性はあまりに誇大に宣伝されたため、人類はバナナの皮に対して極度に鋭敏になってしまった。それゆえ、実際にバナナの皮によって横転した人間がいたときは、新聞の社会欄にトップ記事とはいかないまでも報道すべき価値が確かにあるのである。

バナナの皮はさておくとして、この男のキマリ文句である仕事なるものはどうもいかがわしい。立派な、とか、讃^ほめたたうべき、とかいう形容詞がつく仕事になればなるほど、単純に衣食住をまかなうという生物的条件からイッダツしている。たとえば、かりに男が小屋をつくるために斧^{おの}で樹を倒したとする。斧をふるうのには腕力が必要であるから、彼は手ごろの石をエイヤエイヤ差しあげて腕力をきたえていると、別の男がやってきてもっと大きな石を差しあげてみせる。こちらはナニヲ！ というので、更に大きな石を持ちあげる。幾人もの男がやってきて、樹なんか倒すのはそっちのけにして、日がな一日大石を競争で持ちあげている。

しまいに一人の男が、小山のような大石を目よりも高く差しあげると、あいにく足元の土が柔かく、そのままズブズブと地面の中にもぐりこんでしまい、その上に大石

がのっかって、あわれや彼はゴリンジュウである。するとみんなはその石に「アップレ・ゴーケツの墓」などと彫りつけて、手を叩いて彼の怪力をほめたたえる。その女房が泣こうが騒ごうが知ったことではない。

どうも妖しげな情熱にひかれて、なにやかやとしてかすのが男の仕事であり、存外生存の法則にのっとっていないことが多い。

はるか山の上をまわらねばならぬ迂遠な道があると、そのうち一人の男の目が光りだし、ハタと膝を打ち、家にとってかえすと、槌やらノミやらを持ちだして、固い岩にトンネルなどウガちだす。ゴハンの時間がきても帰ろうとしない。眠る時間となっても戻りはせぬ。やがて髭ボウボウとなり、頬はこけ、マナコはくぼみ、それでもトンカチトンカチやっている。ついに女房は子連れて家出をし、軒はかたむき、そこにペンペン草が生えても、そんなことは意に介さない。もう、村人の便利のためにトンネルを掘るといふ目的すらもアイマイとなって、岩をトンカチトンカチやること自体が執念となっている。かくて十何年もたち、むこうの岩がくずれると眩い日の光がさしこみ、ミイラのごとき男はウウムと満足げにうなづいてそのまま大往生である。

すると、その男のことをヘンジン、コジキ、モグラモチなどと嘲あざけっていた村人たちは集まってきて、偉人、恩人、先覚者などとほめたたえ、モグラモチトンネルなどと名づけて語り草とする。この場合、一家離散し、妻子がひどい目に会っているほど賞しょう讃さんの声も大きい。

あまり大仰おおぎような例ではまずいので、たとえばここに一人の作家がおり、女房が美容院からもどってきてちよつと髪など見てもらいたがっていてもふりむこうとせず、「あなた、お茶」といえば喉のどの奥で「ウー」とか答え、「あなた、うちの子が落第しました」といえば「俺に似たんだ」と一声つぶやき、ひどいになると「消えてなくなれ！」などとわめき、さて一人になると髪かみの毛をかきむしり、一体何をクギンしているのかと思うと、ある文章の末尾を「だった」にしようか「であった」でおさめようかと悩んでいるのである。

そうして出来あがったのをみると、これはやはり名作で、本当はそうでないことが多いのだが、話の都合上やはり名作で、末代までも残るのであるが、一体この名作がこの世にどれだけの益をおよぼすかというところ、これはかなり疑問である。かりに広い意味で益をおよぼしたとしても、作者が髪かみの毛をかきむしってクギンした微妙な箇所

は、音楽が本当は音感もたしかで楽器くらいいいじくった人でないとわからないと同様、一般の人には効果をおよぼしはしない。

女房の髪くらい見てやって、準名作をかいだほうが世のためとも考えられる。準名作と名作を区別できる人たちは、むろん名作があつたほうが人生が豊かになると考えがちだが、そういう連中は名作によってユウウツになるか、なかには自分も髪の手をかきむしり、「だつた」にしようか「であつた」にしようかなどとクギンするようになるので、人類にとってはマイナスのほうが多いかも知れぬ。

ごくごく大ザッパではあるが、男の仕事とはまあざつとかくのごときものである。

ところが女となると、これははるかに生物的条件、あるいは生存の法則にのっとりた仕事をやる。ちかごろは次第にそうでない女性がふえだしたが、これは社会的原因によるもので、女性自身の変化によるものではなからう。

ミツバチとかアリの社会は、この男女の仕事ぶりがなかなか象徴的ともいえる。女王はむろん卵を産むという根本的な大役をもっている。あちこちかけまわって蜜みつを集めたり、巣をこしらえたり、子供の世話をしたりするのは働き蜂ばちであるが、これは雌